

Title	女性政治家の選出は民主主義に対する政治的態度に影響するか? : 回帰不連続デザインに基づく実証的検討
Sub Title	Does electing women politicians affect political attitudes toward democracy? : evidence from a regression discontinuity design
Author	築山, 宏樹(Tsukiyama, Hiroki)
Publisher	慶應義塾大学法学会
Publication year	2024
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.97, No.2 (2024. 2) ,p.85- 108
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	河野武司教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20240228-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

女性政治家の選出は民主主義に対する政治的態度に

影響するか？

—— 回帰不連続デザインに基づく実証的検討 ——

築 山 宏 樹

- 一 はじめに
- 二 女性の記述的代表と政治的態度
- 三 データと方法
- 四 分析結果
- 五 結 論

一 はじめに

女性政治家を選出することは、有権者の民主主義に対する政治的態度にどのように影響するのだろうか。政治分野における女性のエンパワーメントは、現代の世界的な関心事の一つであり、過去数十年間にわたり、多くの国が公職者に占める女性の割合を増加させてきた。このような女性の記述的代表 (descriptive representation) が社会に及ぼす影響については、政治学の文献でも広範な議論が交わされているところである。女性政治家は、男

性政治家に比して女性有権者の政策選好を代表する傾向があり、実際、女性政治家の割合が増加すると、政策選択が大きく変容する。⁽¹⁾つまり、女性の記述的代表は、その実質的代表 (substantive representation) にも影響する。その結果、女性政治家が増加すると、女性有権者は政治家の応答性に対する外的有効性感覚 (Atkeson and Carrillo 2007) や、民主主義に対する満足度 (Karp and Banducci 2008; Williams et al. 2021) を抱きやすくなる。また、女性が公職に就き、「ガラスの天井 (glass ceiling)」を突き破る様子を目の当たりにすると、リーダーの役割を男性に、家庭内の役割を女性に結び付けるような固定観念が正され、女性の政治的関与が促進され (Beaman et al. 2009)、女性の統治能力に対する信念が向上するという (Alexander 2012)。もちろん、その強弱・文脈依存性・長期的効果 (Dassonneville and McAllister 2018; Gilardi 2015; Wolak 2020) については異論もあるが、概ね、女性政治家の選出が女性有権者の政治的態度に正の影響をもたらすことが示唆されている。一方で、男性有権者に対してはそのような影響が見られないことが多い。

上記のように女性の記述的代表と有権者の政治的態度との関連については、膨大な研究蓄積が存在するものの、両者の因果関係を捉えることには、方法論上の懸念が残されている。そもそも、いかなる政治的代表が選出されるのかは、民主的社會においては、有権者の選挙における投票行動によって決まるのであり、それらの投票行動は有権者の政治的態度と強く関連するものである。そのため、女性政治家の存在と有権者の政治的態度との関連を見ても、女性政治家の存在が有権者の特定の政治的態度を生じさせたのか、そうした有権者の政治的態度こそが女性政治家の選出をもたらしたのかは識別できない (cf. Brookman 2014)。既存研究では、インドの村議会議長・議員の女性の割当枠を用いた政策実験 (Beaman et al. 2009; Bhavani 2009) や、女性候補者の接戦選挙に基づく回帰不連続デザイン (Broockman 2014; Jankowski et al. 2019; Kuipers 2020) を用いて、女性政治家の選出の因果効果を捉えようとする一部の研究を除き、依然として大半の実証的知見が、地域・選挙区別の女性議員割合と

有権者の政治行動・政治的態度との間の横断的・縦断的な相関を捉えようとする相関的アプローチに基づくものに留まっている。とりわけ、有権者の民主主義に対する満足度や政治的有効性感覚など、政治学特有の諸態度への因果効果に注目するものは見当たらない。女性の記述的代表が、女性——そして男性の市民的態度をいかに形成するかを明らかにすることは、女性の記述的代表の意義を考えるにあたり重要な知見を提供するものである。本稿では、既存研究の因果推論アプローチのうち、女性候補者の接戦選挙に基づく回帰不連続デザイン（RD：regression discontinuity design）を調査データに組み合わせる手法を用いて、このような問題に取り組む。具体的には、一九九〇年から二〇一六年までの American National Election Studies（ANES）の調査データと米国連邦議会の下院選挙区の選挙結果を結合させた上で、女性候補者が選挙区において僅差で当選したか否かに基づく回帰不連続デザインを利用することで、女性政治家の選出が有権者の民主主義に対する政治的態度に与える因果効果を推定することを試みる。もし接戦選挙において女性候補者の当落があたかも無作為に決まるのであれば、当落を分ける得票マージンの閾値前後の選挙区から抽出された標本群は平均的に同質的な集団であると思われる。それゆえ両者の回答結果の比較から、女性政治家の選出が有権者の政治的態度に与える影響を推定できる。ただし、後述の通り、サーベイ調査に接戦選挙RDDを組み合わせる場合、調査対象者が調査に協力するかどうか閾値前後で内生的に決まりうるという自己選択バイアスに留意する必要がある。

本稿の分析結果からは、女性政治家が選出されると、女性有権者の内的有効性感覚が高まる一方で、男性有権者の民主主義に対する満足度が低下することが明らかになった。より詳細な部分標本別の追加分析では、性別の社会的な役割に関するステレオタイプが、そうしたステレオタイプに反する状況への否定的な感情を生じさせるという役割適合性理論の予測と一貫した結果を得た。性別の役割に対する偏見の存在は、女性の記述的代表と民主主義に対する政治的態度との間に望ましくならぬ影響をもたらす可能性があると言える。

二 女性の記述的代表と政治的態度

女性の記述的代表が有権者の政治的態度に与える影響については、女性政治家の選出が女性有権者の政治的態度に正の影響をもたらすという主張の妥当性が議論されている。民主的過程において、女性政治家が選出されることは、女性有権者にとって実質的なものと象徴的なものの二つの意味があるだろう。

第一に、女性政治家が選出されることで、女性有権者の政策選好が政策選択により強く反映されるようになる結果、女性有権者は民主的過程や政治的アクターに対して肯定的感情を抱きやすくなる可能性がある。つまり、女性の記述的代表は、政策に影響を及ぼするという点で女性有権者にとって実質的な意味がある。様々な分野の文献が、女性と男性の選好の相違を示している。たとえば、一般に、女性は男性に比べて、効率性よりも公平性に関心を示し、再分配を好む傾向があるため、女性有権者は男性有権者よりリベラルで、福祉政策を重視しやすいところ（cf. Hessami and Lopes da Fonseca 2020）。女性政治家自身、男性政治家よりもリベラルで、福祉政策を好みやすく（Poggione 2004）、実際に、女性政治家は、このような女性の社会的な関心・問題を取り上げて選挙を戦い、議会の予算配分にも影響を行使しうる（Kuipers 2020）。すなわち、女性の記述的代表が進むことで、その実質的代表も達成されやすくなる。このような合理的な期待の下で、女性有権者は、女性政治家が選出されると、自分たちの政策選好が一層、民主的過程や政治的アクターの行動に反映され则认为やすくなる結果、民主主義のあり方について満足しやすく（Karp and Banducci 2008; Williams et al. 2021）、政治家一般の応答性について外的有効性感覚を抱きやすくなるものと考えられる（Atkeson and Carrillo 2007）。

一方、第二に、女性政治家が現れることには、政策選択への影響とは独立して、それ自体に象徴的效果（symbolic effects）があるともされる。たとえば、女性が政治的領域から排除され続けると、そのような歴史・現

状を追認するように、女性は政治的リーダーシップに適さないとか、統治能力を欠いているという固定観念を醸成してしまう可能性が高い (Alexander 2012)。女性自身が、自己の政治的能力に対する性差別を内面化すると、内的有効性感覚や政治関心を失い、政治的会話や投票参加などの政治的関与を避けるようになるかもしれない (Broockman 2014)。ロールモデル理論 (role-model theory) によれば、女性政治家 (競争的な女性候補者) の存在は、それ自体がロールモデルとして象徴的に作用する結果、政治的領域における女性の役割に対する偏見を脱し (Beaman et al. 2009)、女性の内的有効性感覚を高め、政治的会話の頻度を増加させ (Alkeson 2003)、女性の統治能力に対する信念を向上させる契機になると考えられる (Alexander 2012)。もちろん、ロールモデルの象徴的効果は、民主主義の歴史が浅く、女性に対する性差別が蔓延している社会では大きな意味を持つかもしれないが、女性の記述的代表が部分的にでも達成されはじめれば、女性政治家が追加的に増えたからといって、ロールモデルとしての画期性を欠くかもしれない点には留意が必要である (Broockman 2014; Gilardi 2015)。

要約すると、女性の記述的代表は、実質的・象徴的な意味づけから、女性有権者の民主主義に対する政治的態度に正の影響をもたらすことが主張されている。一方、これらの因果メカニズムからも示唆されるように、実証上は、女性政治家の選出は、男性有権者の政治的態度には影響を与えない場合が多い。⁽³⁾ 本稿では、民主的満足度と、外的・内的有効性感覚という、有権者の民主主義に対する基礎的な政治的態度に注目して、次のような仮説を検証する。

仮説 1 女性政治家が選出された選挙区では、女性有権者の民主主義に対する満足度や、政治的有効性感覚が

高まりやすい。

他方、既存研究では、女性の記述的代表が有権者の政治的態度に「負」の影響をもたらしうる点について十分な議論が行われていないかもしれない。心理学・経営学などの分野では、役割適合性理論 (role congruity theory) の観点から、女性リーダーに対する偏見から生じる負の影響を議論している。役割適合性理論は、女性が男性よりもリーダーシップ能力を欠くと認識されやすいこと、また、女性がそうした性別役割の偏見に反するようなリーダーとしての役割を担った場合に、男性よりも否定的に評価されやすいことを主張する (Eagly and Karau 2002)。要は、男性と女性の性別役割 (gender roles) とリーダーシップの役割 (leadership roles) とのステレオタイプの間の適合性 (congruity) が失われることが、否定的な感情を生むことが示唆されている。もし女性政治家が選出されることで、有権者が有する女性の政治的リーダーシップに対するステレオタイプとの間の適合性が失われると、民主主義の機能や政治的有効性感覚に関して否定的な評価を持つ可能性があるだろう。特に、男性有権者の場合には、実質的・象徴的な意味での正の影響を受け取らない分、女性政治家の選出が政治的態度に負の影響を与えることも考えられる。そこで、本稿では、男性有権者の民主主義に対する政治的態度について、次のような仮説を検証する。

仮説 2 女性政治家が選出された選挙区では、男性有権者の民主主義に対する満足度や、政治的有効性感覚が

低まりやすい。

三 データと方法

(一) データ

上記の二つの仮説を検証するために、本稿では、一九九〇年から二〇一六年までの American National Election Studies (ANES) の調査データと米国連邦議会の下院選挙区の選挙結果を結合させた上で、女性候補者が選挙区において僅差で当選したか否かに基づく回帰不連続デザインを推定する。米国連邦議会の下院は、一部の州を除き、決選投票のない単純小選挙区制 (first-past-the-post voting) によって選挙が行われ、多くの選挙区では二大政党の候補者間で議席が争われるために、二大政党得票に占める得票率が五〇%を上回るか否かの閾値で当落が決まるという点において、接戦選挙 RDD の推定が容易である。また、本稿の研究の文脈では、米国のデータに基づく研究蓄積が多いところである。そのため、分析結果の比較から、既存の観察研究のバイアスの存在を推論しやすい。一方、米国連邦議会は、一九九〇年代以降、女性候補者・女性政治家の割合を大きく増加させているものの、女性政治家の歴史は決して新しくはなく、ロールモデル理論からすると、女性の記述的代表の影響が現れにくい保守的な事例となりうる (Brockman 2014)。もし民主主義の歴史の長い米国連邦議会においてさえ、女性政治家の選出が有権者の民主主義に対する政治的態度に影響を与えるとすると、他の地域においても一般化可能性の高い知見であると考えられるかもしれない。

ANES データは、時系列の累積データである「Time Series Cumulative Data File (1948-2016)」を利用する⁽⁴⁾。米国連邦議会の下院選挙区の選挙結果については、MIT Election Data and Science Lab (MEDSL) の「U.S. House 1976-2020」を⁽⁵⁾、女性候補者のデータについては、Center for American Women and Politics (CAWP) の「CAWP Congressional Women Candidates Database (1990-2020)」を用い⁽⁶⁾、これら二つのデータを年度・

選挙区レベルで結合した。その上で、女性候補者の接戦選挙から、女性政治家の選出の効果を識別するために、共和党・民主党の二大政党が一名ずつの候補者を擁立しており、かつ、両党の候補者のいずれか一名が女性候補者である選挙区の回答データのみを分析対象とした。

本稿が理論的に関心を持つ従属変数は、民主主義に対する満足度と、外的・内的／政治的有効性感覚である。まず、民主主義に対する満足度は、“On the whole, are you very satisfied, fairly satisfied, not very satisfied, or not at all satisfied with the way democracy works in the United States?”に対する“Very satisfied”―“Not at all satisfied”の四点尺度の回答を利用する⁽⁷⁾。四点尺度は反転させて、数値が大きくなるほど、満足度が高くなるようにコード化した。外的有効性感覚は、“Public officials don't care much what people like me think.”に対する賛否を、内的有効性感覚は、“Sometimes, politics and government seem so complicated that a person like me can't really understand what's going on.”に対する賛否を利用する⁽⁸⁾。“Agree strongly”を“Agree somewhat”を合わせた賛成を1、“Neither agree nor disagree”を0としてコード化した⁽⁹⁾。“Disagree somewhat”を“Disagree strongly”を合わせた反対を3としてコード化した。表1は、それぞれの年度について、分析対象となる女性候補者選挙区の標本割合と、従属変数の利用可否を示したものである。民主主義に対する満足度は、一九九六年以降の一九九八年を除くすべての調査、外的有効性感覚は、一九九〇年以降のすべての調査、内的有効性感覚は、一九九〇年から二〇〇〇年までのすべての調査と二〇〇八年から二〇一二年の調査で利用可能である(表1)⁽⁶⁾。

(二) 推定戦略

本稿は、女性政治家の選出が有権者の民主主義に対する政治的態度に与える影響を推定するために、女性候補者の接戦選挙に基づく回帰不連続デザインを用いる。通常、ある選挙区から女性候補者が出馬するか否かは、選

女性政治家の選出は民主主義に対する政治的態度に影響するか？

表 1 変数リスト

年度	女性選挙区の 標本割合 (N)	民主主義に 対する満足度	外的有効性感覚	内的有効性感覚	妊娠中絶への 賛否
1990	15.18% (261)		✓	✓	✓
1992	29.77% (570)		✓	✓	✓
1994	22.03% (324)		✓	✓	✓
1996	35.28% (447)	✓	✓	✓	✓
1998	23.05% (240)		✓	✓	✓
2000	16.88% (261)	✓	✓	✓	✓
2002	23.45% (287)	✓	✓		
2004	27.98% (265)	✓	✓		✓
2008	22.08% (420)	✓	*	*	*
2012	42.20% (1755)	✓	*	*	*
2016	38.46% (1186)	✓	✓		✓

注：✓ = 設問あり、* = 半数で設問あり。

選挙区の選挙民の特徴によって戦略的に決定されるだろう。また、女性候補者が出馬したとして、女性候補者が票を集められるか否か、選挙で当選できるか否かも、選挙民の特徴に依存するだろう。とすると、女性候補者が選出された選挙区の選挙民の政治的態度と、それ以外の選挙民の政治的態度を比較しても、前者が後者に与える影響のみを取り出すことはできない。

そこで本稿では、女性候補者の接戦選挙に注目する。女性候補者が僅差で当選した選挙区と、僅差で落選した選挙区では、女性候補者の出馬・得票と、選挙民の政治的態度に影響を与える交絡因子の水準は似通ったものになると考えられる。もし女性候補者の当落が、当落を分ける得票マージンの閾値前後であったかも無作為に決まるのであれば、僅差で当選した選挙区と、僅差で落選した選挙区から抽出された標本群は平均的に同質であるとみなすことができる。そのため、両群の従属変数の平均値の比較から、女性政治家が選出されることの局所平均処置効果 (LATE: local average treatment effect) を推定できる (cf. Brockman 2014)。本稿では、女性候補者の二大政党得票に占める得

票率を強制変数 (forcing variable) とした上で、当落を分ける五〇%の閾値に基づき、一次項の局所線形回帰不連続 (RD) 推定値を求めた。⁽¹¹⁾ 標準誤差は、年度・選挙区ごとにクラスター化したロバスト標準誤差を用いる。加えて、共変量として年齢、教育程度、白人ダミー、黒人ダミー、プロテストダミー、カトリックダミーを投入する。

ただし、こうした接戦選挙 RD をサーベイデータと組み合わせることは、サーベイデータ特有の問題が残されている。母集団から標本が無作為に抽出されているのであれば、抽出標本上は、女性候補者の接戦選挙区の調査対象者は、当落を分ける閾値前後で平均的に同質的な集団と考えられる。しかし、調査対象者が調査に協力するか否かは、調査対象者の選択によって決まるため、もし女性政治家の選出が、調査回収率に影響する場合には、回収標本上の両群の特徴は体系的に異なるものになりうる。結果として、調査協力に基づく自己選択バイアス (self-selection bias) によって、RD 推定値にバイアスが生じてしまう。これはサーベイ調査に内在的な問題であり、相関的アプローチについては言うまでもないが、処置の割り当てが調査と独立に行われている限り、女性の無作為な議席割当枠を用いた政策実験 (Beaman et al. 2009; Bhavnani 2009) や、女性政治家の追加当選に基づく回帰不連続デザイン (Kuijpers 2020) などの因果推論アプローチでも同様に問題になると考えられる。

本稿では、観察可能な共変量の連続性の仮定に対する前提チェックから、強制変数の閾値前後で調査回答者に自己選択バイアスが生じているか否か、生じている場合には、RD 推定値に上方か下方か、どちらの方向にバイアスが生じている可能性が高いかを検討する。具体的には、性別ごとの部分標本で、年齢、教育程度、人種、宗教などの先決変数 (predetermined variables) と考えられる社会経済的属性の RD 推定値を求めて、それらの平均値に不連続な偏りがないかを検証する。もし偏りがあるならば、女性政治家が選出されたことで、特定の属性を持つ調査対象者が調査に協力しなくなった (するようになった) ことが示唆される。その場合は、これらの共

変量を独立変数とした回帰分析から、従属変数との間の相関を確認した上で、そのような自己選択バイアスがRD推定値にもたらすバイアスの方向を推論する。もし、本稿の仮説にとって不利なバイアスが生じているならば、因果効果自体にはバイアスがあるものの、保守的な結果を導いているとして、仮説検証の妥当性自体は認められるかもしれない。上記の通り、回帰不連続デザインでは経験的な前提チェックを行うことが可能であり、前提がどのように侵害されているかを確認することで、推定値のバイアスのメカニズムや、その方向について示唆を得ることができるのは、むしろ本手法の利点の一つである (Caughey and Sekhon 2011)。

四 分析結果

(一) 主要結果

表2は、男女別有権者の部分標本ごとに、女性候補者の得票マージンを強制変数として、女性政治家の選出が、民主主義に対する満足度、外的有効性感覚、内的有効性感覚に与える影響を局所線形回帰不連続デザインで推定したRD推定値を示したものである。また、図1では、左列に女性有権者、右列に男性有権者のRDプロットを示している。

第一に、女性有権者について見ると、下院選挙区で女性政治家が当選した場合、「政治や政府などは複雑すぎて自分のような人間にはよくわからないことがある」という主張に同意しない回答者が増えて、内的有効性感覚が高まることがわかる。このRD推定値は5%水準で統計的に有意である。他方で、「政治家は自分のような人々の考えなど気にかけない」という外的有効性感覚に関する主張や、「全体として、米国の民主主義のあり方に満足しているか」という民主主義に対する満足度の回答結果には5%水準では統計的に有意な影響がない。⁽¹²⁾ 第

表 2 政治的態度に対する女性政治家選出の効果の RD 推定値
(男女別有権者)

	女性有権者		
	民主主義に 対する満足度	外的有効性感覚	内的有効性感覚
RD Estimate	-0.1386 [0.0503]	0.0257 [0.3023]	0.3462 [0.0002]
N	2076	2339	1565

	男性有権者		
	民主主義に 対する満足度	外的有効性感覚	内的有効性感覚
RD Estimate	-0.4155 [0.0000]	0.0974 [0.3254]	-0.1245 [0.3627]
N	1862	2015	1342

注：セル内の値は、各列の政治的態度に対する RD 推定値を示している。角括弧内の値は、Calonico *et al.* (2014) が提案するロバストノンパラメトリック推定に基づく有意確率。各モデルは、得票マージンを強制変数とした、一次項の局所線形関数を用いている。標準誤差は、年度・選挙区ごとにクラスター化している。共変量として、年齢、教育程度、白人ダミー、黒人ダミー、プロテスタントダミー、カトリックダミーを含めている。

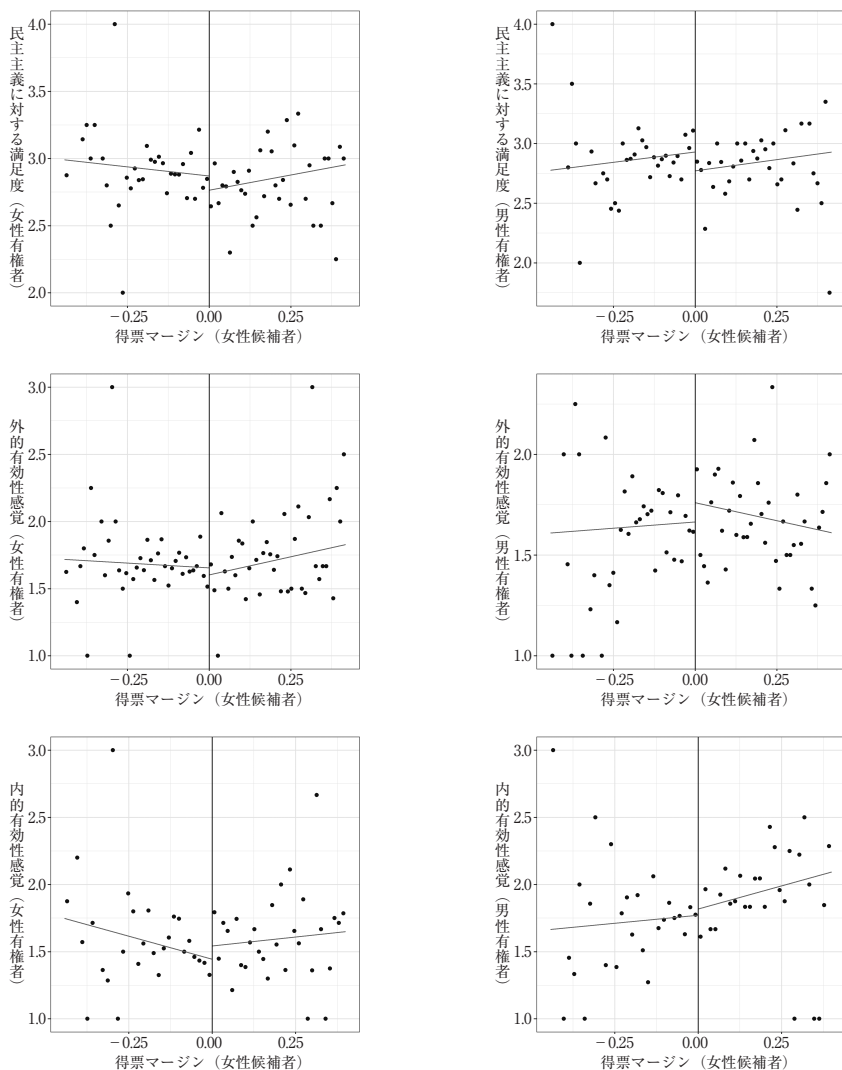
二に、男性有権者について見ると、下院選挙区で女性政治家が当選すると、米国の民主主義のあり方に満足していると答える回答者が減って、民主主義に対する満足度が低下することがわかる。この RD 推定値は 5% 水準で統計的に有意である。他方で、外的有効性感覚や内的有効性感覚に関しては、統計的に有意な影響を与えていない。

女性政治家選出の効果のこうした性差の存在は、本稿の仮説 1・2 の予測に合致したものである。米国のように民主主義の歴史の長い国であっても、下院選挙区で女性政治家が選出されると、女性有権者は、政治的能力に対する内面化された性差別を見直す結果、内的有効性感覚を改善する傾向にある。男性有権者の内的有効性感覚には影響しない点は、女性の記述的代表が象徴的な意味を持つというロールモデル理論の因果メカニズムの妥当性を示唆するものである。ただし、仮説とは異なり、外的有効性感覚への影響は見られなかった。

一方、男性有権者は、女性政治家の選出をもつ

女性政治家の選出は民主主義に対する政治的態度に影響するか？

図1 政治的態度に対する女性政治家選出の効果のRD プロット
(男女別有権者)



注：各プロットは女性候補者の得票マージンのビンにおける男女別有権者の政治的態度の平均値を示している。ビンのバンド幅選択は Calonico et al. (2015) の提案手法に基づいている。実線は得票マージンの一次線形関数を表している。

て、自国の民主主義のあり方に不満を抱くようになる。役割適合性理論に基づけば、連邦議会の下院議員という重要な政治的リーダーシップの役割に対して抱くステレオタイプと、女性の性別役割に対して抱くステレオタイプとの適合性の不一致が、選挙による民主主義の機能に対する否定的な評価を生じさせている可能性がある。

(二) 追加分析

女性の記述的代表が、女性の政治的有効性感覚には正の影響を持つが、男性には影響を持たないということは、既存研究でも検証が行われているロールモデル理論によって説明が付きそうである。一方、女性の記述的代表が、男性の民主主義に対する満足度に負の影響を与えるということは既存研究では説明のつかないパズルである。本稿は、役割適合性理論に基づき、その因果関係を説明している。そこで、このようなメカニズムの妥当性を検証するために、より詳細な部分標本別のRDDを用いた追加分析を行う。

役割適合性理論によれば、女性の性別役割にステレオタイプを有する有権者ほど、女性が政治的リーダーシップを担うことに対して反感を抱くことが予想される。もし女性政治家の選出が、男性の民主主義に対する満足度を低下させる理由の一つが、男性ほどそのような性別役割に対する偏見を持ちやすいことにあるならば、性別役割に関するステレオタイプを持ちやすい男性では、民主主義に対する満足度が低下しやすく、性別役割に関するステレオタイプを持ちにくい男性では、満足度が低下しないはずである。

本稿では、性別役割に関するステレオタイプの代理変数として、妊娠中絶への賛否の回答結果を利用する。⁽¹³⁾ 妊娠中絶への賛否は、“There has been some discussion about abortion during recent years. Which one of the opinions on this page best agrees with your view? You can just tell me the number of the opinion you choose.”とじて尋ねられおり、“1. By law, abortion should never be permitted.” “2. The law should permit

abortion only in case of rape, incest, or when the woman's life is in danger.” “3. The law should permit abortion for reasons other than rape, incest, or danger to the woman's life, but only after the need for the abortion has been clearly established.” “4. By law, a woman should always be able to obtain an abortion as a matter of personal choice.” から選択する形式である。このうち、1から2までを妊娠中絶反対寄り、3から4を妊娠中絶容認寄りとしてコード化して、男女・妊娠中絶賛否別の部分標本で同様のRDDを推定した。

表3は、男女・妊娠中絶賛否別の部分標本ごとのRDD推定値を示したものである。男性有権者の間では、妊娠中絶反対派・容認派ともに、女性政治家が選出された場合に、民主主義に対する満足度を統計的に有意に低下させるが、役割適合性理論の予測の通り、妊娠中絶に厳格な立場を取る男性有権者の方が、RDD推定値の絶対値は大きく、より大きく民主主義に対する満足度を低下させる。加えて、女性有権者では、女性政治家が選出されることで内的有効性感覚が向上する効果は、妊娠中絶に寛容な立場を取る部分標本でのみ、統計的に有意である。

以上の分析結果から、女性の記述的代表は、それが性別役割の適合性に矛盾すると受け止められた場合には、男性有権者の民主主義に対する不満を生じさせる可能性があること、また、女性有権者の政治的能力への自信向上を阻害する可能性があることがわかった。

(三) 前提チェック

女性候補者の接戦選挙RDDでは、女性候補者が当選するか否かが、抽出標本上は得票マージンの閾値前後であたかも無作為に決まるとみなせるかもしれない。一方、そうした接戦選挙RDDをサーベイデータと組み合わせる場合、女性候補者の当落によって調査対象者が調査に協力してくれるか否かが内生的に決まりうる点に注意が必要である。たとえば、女性政治家が選出されたことで、自国の民主主義に不満を抱いた男性有権者は、調査

表 3 政治的態度に対する女性政治家選出の効果の RD 推定値
(男女・中絶賛否別有権者)

	女性有権者・妊娠中絶反対		
	民主主義に 対する満足度	外的有効性感覚	内的有効性感覚
RD Estimate	-0.5031 [0.0563]	0.3012 [0.1792]	0.2154 [0.1482]
N	701	824	575
	女性有権者・妊娠中絶容認		
	民主主義に 対する満足度	外的有効性感覚	内的有効性感覚
RD Estimate	-0.0793 [0.2071]	-0.0278 [0.8834]	0.4896 [0.0357]
N	1102	1280	909
	男性有権者・妊娠中絶反対		
	民主主義に 対する満足度	外的有効性感覚	内的有効性感覚
RD Estimate	-0.9540 [0.0005]	0.0562 [0.8542]	-0.0705 [0.7780]
N	651	733	505
	男性有権者・妊娠中絶容認		
	民主主義に 対する満足度	外的有効性感覚	内的有効性感覚
RD Estimate	-0.2083 [0.0041]	0.0391 [0.9232]	-0.0014 [0.9510]
N	1008	1109	771

注：セル内の値は、各列の政治的態度に対する RD 推定値を示している。角括弧内の値は、Calonico *et al.* (2014) が提案するロバストノンパラメトリック推定に基づく有意確率。各モデルは、得票マージンを強制変数とした、一次項の局所線形関数を用いている。標準誤差は、年度・選挙区ごとにクラスター化している。共変量として、年齢、教育程度、白人ダミー、黒人ダミー、プロテスタントダミー、カトリックダミーを含めている。

女性政治家の選出は民主主義に対する政治的態度に影響するか？

表 4 共変量に対する女性政治家選出の効果の RD 推定値
(男女別有権者)

	女性有権者		
	年齢	教育程度	白人ダミー
RD Estimate	9.7800 [0.0000]	0.3271 [0.0000]	0.0238 [0.3560]
N	3109	3109	3109

	女性有権者		
	黒人ダミー	プロテスタント ダミー	カトリック ダミー
RD Estimate	0.0077 [0.9495]	-0.2045 [0.0000]	0.1975 [0.0000]
N	3109	3109	3109

	男性有権者		
	年齢	教育程度	白人ダミー
RD Estimate	4.1837 [0.0006]	0.2755 [0.0001]	0.1151 [0.0000]
N	2696	2696	2696

	男性有権者		
	黒人ダミー	プロテスタント ダミー	カトリック ダミー
RD Estimate	-0.0509 [0.0000]	0.2191 [0.0027]	-0.0287 [0.1680]
N	2696	2696	2696

注：セル内の値は、各列の共変量に対する RD 推定値を示している。角括弧内の値は、Calonico *et al.* (2014) が提案するロバストノンパラメトリック推定に基づく有意確率。各モデルは、得票マージンを強制変数とした、一次項の局所線形関数を用いている。標準誤差は、年度・選挙区ごとにクラスター化している。

表 5 政治的態度に対する共変量の OLS 推定値
(男女別有権者)

	女性有権者					
	民主主義に 対する満足度		外的有効性感覚		内的有効性感覚	
	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.
年齢	0.0038	0.0005***	-0.0019	0.0005***	-0.0020	0.0005***
教育程度	0.0537	0.0099***	0.1529	0.0097***	0.2073	0.0114***
白人ダミー	-0.0571	0.0254*	0.0216	0.0235	0.0213	0.0284
黒人ダミー	0.0127	0.0338	-0.0451	0.0321	0.0678	0.0333*
プロテスタントダミー	0.0768	0.0200***	0.0261	0.0213	-0.0958	0.0252***
カトリックダミー	0.1553	0.0230***	0.0265	0.0247	-0.0825	0.0292**
年度ダミー	YES		YES		YES	
調整済み R ²	0.0667		0.0668		0.0662	
N	8548		10678		7563	

	男性有権者					
	民主主義に 対する満足度		外的有効性感覚		内的有効性感覚	
	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.	Coef.	Std. Err.
年齢	0.0050	0.0006***	-0.0015	0.0005**	-0.0035	0.0007***
教育程度	0.0214	0.0106*	0.1614	0.0102***	0.2985	0.0125***
白人ダミー	-0.0885	0.0259***	-0.0013	0.0253	0.0415	0.0339
黒人ダミー	0.0053	0.0389	0.0256	0.0357	0.0621	0.0455
プロテスタントダミー	0.1194	0.0214***	0.0046	0.0216	-0.0917	0.0279**
カトリックダミー	0.2152	0.0248***	0.0388	0.0252	-0.0680	0.0318*
年度ダミー	YES		YES		YES	
調整済み R ²	0.0818		0.0640		0.1075	
N	7437		9111		6423	

注：括弧内は年度・選挙区ごとにクラスター化したロバスト標準誤差。

***：p < 0.001 **：p < 0.01 *：p < 0.05。すべてのモデルに年度ダミーを含めている。

に回答しにくいかもしれない。ここでは、先決変数とみなせる共変量に対して、同様のRDDを実行することで、そのような自己選択バイアスの有無について、前提チェックを行う。

表4は、男女別有権者の部分標本ごとに、女性候補者の得票マージンを強制変数として、女性政治家の選出が、年齢、教育程度、人種、宗教に与える影響を局所線形回帰不連続デザインで推定したRDD推定値を示したものである。女性政治家が選出されることで、社会経済的変数が変化するとは考えられないので、これらの変数は、抽出標本上は先決変数とみなしてよいだろう。もしこれらの変数に偏りがある場合、そのような偏りは、女性候補者の当落が無作為に決まっているという仮定の下では、調査回答の自己選択バイアスに起因するものと考えられる。表4を見ると、女性政治家が選出されると、女性有権者では、年齢、教育程度が高い、カトリックの回答者が増加して、プロテスタントの回答者が減少する一方で、男性有権者では、年齢、教育程度が高く、白人、プロテスタントの回答者が増加して、黒人の回答者が減少する。

これらの自己選択バイアスの存在は、回収標本の特徴を得票マージンの閾値前後で歪める結果、政治的態度に対するRDD推定値にバイアスをもたらすものである。そこで次に、これらの共変量に各政治的態度を回帰する通常の線形回帰分析を推定することで、回収標本の共変量の偏りが、RDD推定値に上方・下方のいずれのバイアスを生じさせている可能性があるのかを相関的アプローチから推論する。

表5は、男女別有権者の部分標本ごとに、共変量を独立変数として、民主主義に対する満足度、外的有効性感覚、内的有効性感覚との相関を線形回帰分析で推定したOLS推定値を示したものである。⁽¹⁴⁾ RDD推定値で偏りがある共変量のみ注目すると、まず、女性有権者の内的有効性感覚とは、年齢が負、教育程度が正、プロテスタント、カトリックが負の相関を持っている。女性政治家が選出されることで生じる女性有権者の属性の偏りは、主要結果に上方・下方の両バイアスをもたらしており、仮説に有利・不利いずれの結果となっているかは判然と

しない。一方で、男性有権者の民主主義に対する満足度とは、年齢、教育程度、プロテスタントが正の相関、白人が負の相関を持っている。女性政治家が選出されることで生じる男性有権者の属性の偏りは、白人を除いて、主要結果に上方バイアスをもたらしており、これは仮説に不利な結果となっている。男性有権者の民主主義に対する満足度に対する RD 推定値は、保守的でない結果を導いているとまでは言えないだろう。

五 結 論

女性の記述的代表が有権者の民主的態度に与える影響については、政治学も大きな関心を寄せてきたが、ほとんどの実証的知見は観察研究によるものだった。本稿では、ANES の調査データに下院選挙区の女性候補者の接戦選挙 RDD を組み合わせることで、女性政治家の選出が有権者の民主的態度に与える因果効果を捉えようとした。

本稿の分析結果からは、調査対象者の自己選択バイアスには注意が必要なもの、女性政治家が選出されることで、女性有権者の内的有効性感覚が高まる一方で、男性有権者の民主主義に対する満足度が低下する可能性が示された。さらに、追加分析の結果は、女性政治家の存在がロールモデルとなつて、女性有権者の政治的能力に対する内面化された性差別が是正されるという女性の記述的代表の意義を確認しつつも、女性に対する性別役割の偏見が、男性有権者の民主主義に対する反感を生み、女性が政治的能力への自信を取り戻す契機を失わせるなどの問題を示唆するものであった。今後の研究では、女性の記述的代表の正の影響だけでなく、役割適合性理論が含意するような負の影響にも光を当てる必要があるだろう。

- (1) レビュー論文として、Wängnerud (2009)、Hessami and Lopes da Fonseca (2020)。
- (2) Brockman (2014) の整理を参照。
- (3) 相関のアプローチでは、女性議員割合の増加が、弱いながらも男女ともに有権者の民主的満足度を高めるという報告もあり (Karp and Banducci 2008)。また、因果推論アプローチでは、男性の女性に対する親密なパートナーからの暴力 (IPV : intimate partner violence) を正当化するか否かといった極端な性差別については、女性議員の追加的選出が男性の偏見の是正に役立つという報告もある (Kuipers 2020)。
- (4) <https://electionstudies.org/data-center/> (二〇二一年七月二四日)。
- (5) MIT Election Data and Science Lab (2017)。
- (6) https://campusregents.edu/facts/elections/past_candidates (二〇二一年七月二七日)。
- (7) 一九九六年、二〇〇〇年、二〇〇二年調査では、“Very satisfied”ではなく“Satisfied”を用いた四点尺度で尋ねられており、累積ファイル上は別の変数として扱われているが、本稿では比較可能な設問として扱った。
- (8) つまり、数値が大きくなるほど、政治的有効性感覚が高くなるコード化になっている。
- (9) また、追加分析で用いる妊娠中絶への賛否の変数については、一九九〇年以降の二〇〇二年を除くすべての調査で利用可能である。
- (10) 得票マージン＝女性候補者の得票数／(共和党・民主党候補者の得票総数)－0.5。0以上で当選、0未満で落選となる。
- (11) 推定手法としては、Calonico et al. (2014) が提案する最適幅の選択アルゴリズムを用いた。本稿のRDDの推定やRDDプロット作成には、“fdrrobust”パッケージ(ver 2.2)を利用した (Calonico and Calonico 2023)。
- (12) ただし、女性有権者の民主主義に対する満足度の回答結果には10%水準で有意に負の影響がある。後に表3の妊娠中絶賛否別の部分標本別RDD推定値で確認できるように、このような女性有権者の民主的満足度の低下は、妊娠中絶反対派の女性有権者でのみ10%水準で統計的に有意である。女性有権者であっても、性別役割に関するステレオタイプを有する場合には、女性が政治的リーダーシップを担う結果を見て、民主主義という仕組みに不満を抱く可能性がある。

- (13) ANESでは「Women Equal Role Scale」という女性と男性の平等な役割について尋ねる直接的な設問がある。ただし、本変数は、一九九〇年から二〇〇〇年までの調査と、二〇〇四年・二〇〇八年の調査でのみ利用可能であり、とりわけ民主主義に対する満足度を従属変数としたときに、利用可能な部分標本が著しく失われてしまう問題がある。そのため、本稿では、限界があるものの、妊娠中絶への賛否を代理変数とした。なお、一九九〇年以降のデータを用いると「Women Equal Role Scale」(数値が小さいほど平等)と妊娠中絶への賛否(数値が小さいほど反対)の相関係数は -0.2900 で、五%水準で統計的に有意である。
- (14) また、すべてのモデルに年度ダミーを含めている。

参考文献

- Alexander, Amy C. 2012. "Change in Women's Descriptive Representation and the Belief in Women's Ability to Govern: A Virtuous Cycle." *Politics & Gender* 8 (4): 437-464.
- Atkeson, Lonna Rae. 2003. "Not All Cues Are Created Equal: The Conditional Impact of Female Candidates on Political Engagement." *Journal of Politics* 65 (4): 1040-1061.
- Atkeson, Lonna Rae and Nancy Carrillo. 2007. "More Is Better: The Influence of Collective Female Descriptive Representation on External Efficacy." *Politics & Gender* 3 (1): 79-101.
- Beaman, Lori, Raghendra Chattopadhyay, Esther Dufo, Rohini Pande and Petia Topalova. 2009. "Powerful Women: Does Exposure Reduce Bias?" *Quarterly Journal of Economics* 124 (4): 1497-1540.
- Bhavnani, Rikhil R. 2009. "Do Electoral Quotas Work after They Are Withdrawn? Evidence from a Natural Experiment in India." *American Political Science Review* 103 (1): 23-35.
- Broockman, David E. 2014. "Do Female Politicians Empower Women to Vote or Run for Office? A Regression Discontinuity Approach." *Electoral Studies* 34: 190-204.
- Calonico, Sebastian, and Mainmainer Sebastian Calonico. 2023. "Package 'rdrubust'."
- Calonico, Sebastian, Matias D. Cattaneo, and Rocio Titiunik. 2014. "Robust Nonparametric Confidence Intervals for

- Regression-Discontinuity Designs." *Econometrica* 82 (6): 2295-2326.
- Calomico, Sebastian, Matias D. Cattaneo, and Rocio Titiunik. 2015. "Optimal Data-Driven Regression Discontinuity Plots." *Journal of the American Statistical Association* 110 (512): 1753-1769.
- Caughey, Devin and Jasjeet S. Sekhon. 2011. "Elections and the Regression Discontinuity Design: Lessons from Close U.S. House Races, 1942-2008." *Political Analysis* 19 (4): 385-408.
- Dassonneville, Ruth and Ian McAllister. 2018. "Gender, Political Knowledge, and Descriptive Representation: The Impact of Long-Term Socialization." *American Journal of Political Science* 62 (2): 249-265.
- Eagly, Alice H. and Steven J. Karau. 2002. "Role Congruity Theory of Prejudice Toward Female Leaders." *Psychological Review* 109 (3): 573-598.
- Gilardi, Fabrizio. 2015. "The Temporary Importance of Role Models for Women's Political Representation." *American Journal of Political Science* 59 (4): 957-970.
- Hessami, Zohal and Mariana Lopesda Fonseca. 2020. "Female Political Representation and Substantive Effects on Policies: A Literature Review." *European Journal of Political Economy* 63: 101896.
- Jankowski, Michael, Kamil Marcinkiewicz and Anna Gwiazda. 2019. "The Effect of Electing Women on Future Female Candidate Selection Patterns: Findings from a Regression Discontinuity Design." *Politics & Gender* 15 (2): 182-210.
- Karp, Jeffrey A. and Susan A. Banducci. 2008. "When Politics Is Not Just a Man's Game: Women's Representation and Political Engagement." *Electoral Studies* 27 (1): 105-115.
- Kuipers, Nicholas. 2020. "The Effect of Electing Female Candidates on Attitudes toward Intimate Partner Violence." *Journal of Politics* 82 (4): 1590-1595.
- MIT Election Data and Science Lab. 2017. "U.S. House 1976-2020." <https://doi.org/10.7910/DVN/IG0UN2>. Harvard Dataverse, V9, UNF:6hZVpcAdIOKr72+68419/Yw== [file UNF].
- Poggione, Sarah. 2004. "Exploring Gender Differences in State Legislators' Policy Preferences." *Political Research*

- Quarterly* 57 (2) : 305-314.
- Wängnerud, Lena. 2009. "Women in Parliaments: Descriptive and Substantive Representation." *Annual Review of Political Science* 12: 51-69.
- Williams, Neil S., Alexandra Snipes and Shane P. Singh. 2021. "Gender Differences in the Impact of Electoral Victory on Satisfaction with Democracy." *Electoral Studies* 69: 102205.
- Wolak, Jennifer. 2020. "Descriptive Representation and the Political Engagement of Women." *Politics & Gender* 16 (2) : 339-362.